

特集 〈保護者の保育参加〉

「お誕生日保育」で深まる絆

藤井 修

保育園の役割で、最も大切な任務の一つに、生まれたての赤ちゃんを育てる、乳児保育という分野があります。少子化対策の目玉ともいわれる今日にあっても、いわゆる乳児保育のあり方については、寝かせて授乳さえしておけば、狭い室内でも可能な保育とイメージされかねません。公的な保育制度を営利の育児産業のサービ스에 転換させようとする政府の委員会答申などに、その証拠をさがすことはたやすいことです。しかし、ここで紹介する保育は、その対極をめざして努力している例の一つだと思います。

産休明けからの長時間保育に取り組む

わが園の設立は一九八〇年です。当時まだ実施する園が少なかった零歳児保育ですが、集団保育の形態をとらざるをえないものの、「家庭的な特徴を決して失わないようにしよう」と方針を立て、今日に至っています。「家庭的」という意味は、少なくとも、「学校的でない」「ほっとできる」「私的な価値が大切にされる」という点にこだわると解釈していただければと思います。最近では、保育全般に敷衍ひんえんしてliving homeという言葉を訳し「くつろげる故

郷」をめぐすとも申しています。

その方針が、「親の手作りのものを保育に使う」という方法になり、「あの保育園に入ると離乳食用のエプロンから通園リュックまで、いろいろ作り物が多いので大変よ」という評判になりました。でも、実際に入園された皆さんは、「こんな機会でなければ子どもの物を手作りするなんてなかった」と、親になりたての時期を思い出す記憶の一コマになっていると確信しています。

初めてのお誕生日おめでとう

その零歳児保育の特徴の一つに「お誕生日保育」があります。「満一歳の誕生日に両親が仕事を休んで、保育園で一日保育士として過ごしてください」と求めます。柔軟に対応していますが、原則は次のようなもので、その意味では「やや学校的」です。「必ず実施する」「実施日は誕生日の近辺」「両親が同時に参加」「ビデオやカメラを持ち込まない」「結婚式・出産・育児の写真アルバムを持参していただ

く」「自分の子どもと共に、自分の子ども以外の子どもの授乳・離乳食・睡眠・おむつ交換をする」「散歩に出かける」「手作りおもちゃを昼寝の間に作り、それで保育をしてみる」「昼食には保育園の幼児給食を食べる」というプログラムは二十年来変えていません。

保育園側も「園長が記録写真を撮り、記念として差し上げる」「離乳食の進行および家庭での食事について栄養士と懇談」「保育士と家庭のアルバムを見ながら懇談」を行います。

このような方法をとる理由は、子どもにかかわる大人同士の信頼関係を強めたいという願いがあるからです。そして、ホームページやパンフレットによる情報でなく、五感を伴った実体験で、子どもが生活している場と時間を確かなものにしてもらいたいと考えています。

特に、父親の参加には、たとえ仕事の都合で全部の時間が無理でも、努力して来ていただくことを優先しています。職場の理解を促すことや、日頃の子育て



▲お母さんは、わたし。お父さんは、“おともだち”の担当です。

が母親に傾斜している傾向を、この機会に改善してもらおうきっかけにしたいなど、思いはいろいろです。

お誕生日保育ノートから

実施後の感想を綴ったノートは、十冊以上になりました。その中には兄弟で数年ごとに体験した比較などもあり、保育園の歴史を語る貴重な記録です。

そこに共通する感想は、「わが子が一層かわいく、いとおしく感じる事ができた」という点です。生まれて最初の一年の発達には格別なものがあります。

「今日一日、落ち着いた時間の中で、元気に遊んでいるわが子の姿を見ていると、なぜか生まれた日のことを思い出して感動してしまいました」は、夜中から出産に付き合ひ、朝日の中でわが子を抱いた時の感激を書いたFちゃんのお父さんのものです。

「疲れたけど、面白かったよ。他の子どもの成長の早いところばかりが目に残り、帰ったら特訓や！てな気分にはさせられました。」と父親が書いている次のページに、「(散歩先で) 電車を見送る姿は本当

にかわいいですね。こんな慌しい世の中で、この空間だけはほんわかした空気が流れているって感じで、お世話するのも忘れてボーッと見入ってしまいました」と母親が書いています。両親の視点の違いがわかります。

日頃忙しく、子どもと一緒にいる時間の少ない父親は、「特に昼間のわが子がどうすごしているのかは、全く知らなかったという状態でした。正直、妻に任せっぱなしで気がつくとき大きくなっている！そんな感じですよ」と述べ、最後に、奥さんに「いつもありがとう」と書いてありました。夫婦の絆も深まる機会です。

「保育とは何て創造的な職業だろう。でも……」

さて、わが子の保育時間とほぼ同じ一日を体験してみると、異口同音にでてくる感想は、「面白いけど大変な仕事」「特に体力的なハードさを実感しました」です。京都市での職員配置は、零歳児三人に一人の保育士、六人以上の零歳児に一人の離乳食調理

員の加配と恵まれています。当日は、そこへ両親の二名が加わるのでやや保育力は上がりますが、それでも、てきぱきと複数の子どもへの対応をこなしていく保育士の仕事ぶりには、驚嘆の感想が寄せられます。一人のわが子にてこずっている母親からは、

一度に何人もの子どもを昼寝に誘う保育士のリズムミカルな手が「God hands」と評されたり、絵本の読み聞かせに一歳児が集中する姿は「子どもの言葉の力の芽生え」とともに保育士の語りかけの旨さに感じられます。そして様々な食べつぷりに気長に付き合って食事をさせている保育士には、その忍耐強い仕事ぶりに、「真似できない」と尊敬の念すら。

保育園と家庭では育児記録ノートを毎日交換し合っていますが、「実体験すると細かい部分がわかってよかったです」「お誕生日保育から約二週間経ちましたが、作事中、時計を見ると『あー、今ならお散歩かな』とか『お昼寝』かなと思うようになりました。忙しい中でも自分の中でホッと一瞬です」と保育園のイメージが深まっていくのがわかります。

「上のお姉ちゃんからおいしいと聞いていた給食を食べてみて、本当においしかったです。一人ひとりの離乳食もちゃんと考えて調理してあるのには驚きました。特にわが子は食いしん坊ですので、毎日残さず食べているのもうなづけました」は、ラーメン店主のお父さんから調理スタッフへの励ましです。当然、親に保育園のすべてを見せる機会ですので、他の年齢のクラスへも視線は向くことになります。

すると「どのクラスにももう少し人手が必要なのではないかと感じました」とか、「朝七時三十分ごろ子どもを預ける場合、異年齢児が同じ部屋に預けるように指示されます。そこはいつも生活している部屋でなく、馴染みの先生もおられるわけでないの子どもにとつて不安が大きかったようです」と、長時間保育を時差勤務と混合クラスで運営している矛盾に、率直な意見を述べる関係にもなってきました。毎日、慌しく送迎をこなすだけでは、保育制度の仕組みや実際の保育士の配置基準には気づきにくいのが現実です。まる一日、園で親が生活するということ

は、子どもを取り巻く人的な関係も含め、保育環境に問題意識をもつ上で、とても意味があります。

「一日を終えて」

「本当にあつという間の一日でした。でもとってもとっても楽しかったです。仕事に行ってしまう父や母から預けられて、子どもたちはかわいそうという人もいますが、『何を!』という位、保育園での生活は子どもたちにとつても、いい時間だと思えます。他の子どもたちとの接触で学ぶもの大きいこと、栄養のバランスの取れた食事、手作りおやつ、規則正しい生活リズム。家においてほったらかしになることを思えば、園と家庭、先生方と親、このつながりさえしつかりとコミュニケーションがとれていれば、子どもにとつてステキな場所だといえます。」この言葉は親と保育士の絆を深めるものです。これからも「どの子ども大事」に保育していくことを続けていきたいと思えます。

(たかつかさ保育園)